【緑地を楽しむ本】

『北越雪譜 』岩波文庫

鈴木 牧之（著）　岡田 武松（監修）　岩波書店

『北越雪譜』を読むなら冬にかぎる。 岩波文庫の帯には「降り積む越後の雪、その中で暮す人々の哀歓を綴り、雪にちなんだ奇談を集めた、科学的考察に富み、 風土記的な興趣尽きない随筆集」と紹介されている。 筆者は明和7年、越後の国の塩沢に生まれた鈴木牧之（ぼくし）。ここには雪国の様々な断片が語られている。雪崩や冬の洪水の恐ろしさ、特産の越後縮の解説、雪中から燃え出る火の不思議、蝶・狐・狼などの生き物たち。そのどれにも、筆者の人間に対する濁りのない観察と温かな思いが感じられる。例えば、遭難して熊に助けられ一緒に冬眠(?)して生還した男の話。この話のユーモアあふれる紹介の仕方からも鈴木牧之の人柄がしのばれる。文章ももちろん「古文」だが、するすると読める。名文だ。

昨年の冬は寒かった。新潟の大雪のニュースもよく耳にした。そこに暮す人々に思いを馳せながら、私は通勤電車の中で毎日少しずつ『北越雪譜』を読み、一冬かかって読み終わった。この本を読む人にはぜひ寒さの中で一話ずつゆっくり読んでほしい。そして、岩波文庫の巻末の、益田勝実による解説の最後まで読んでもらいたい。最後のページにまた新たな感慨と課題が待っている。

（蔦谷）